

窓

京都新聞 令和2年(2020年)11月11日(水)

コロナ禍 教員負担考えて

木津川市・斧田 夏歩(大学生・20)

新型コロナウイルスの感染拡大を避けるために、今年の3月から5月まで学校が突然休校になった。児童は自宅で過ごしていたが、教員は休校中でも児童たちが学習できるように学校で宿題のプリントを作成したり、児童に分かりやすく説明したりするために動画を配信したりするなど工夫した。また、学校が再開して児童たちが安全に学校生活を送れるように、教室などを消毒するなどの仕事をこなしてきた。

従って教員たちは今までよりも仕事の量が増えてしまったため体調面が心配されてきた。しかし、休校した分の補習授業を、夏休みを短縮して行う必要があり、教員は夏休みに休む暇もなく授業の準備をしなければならなかった。それにより、教員の働き方や健康状態への影響が大きくなっている。

私はただでさえ教員不足であるのに、たくさん仕事をやらなければならないため体調を崩す教員が出てきてしまい、ますます教員の数が減り、学校教育の質が落ちてしまうのではないかと感じた。これ以上、教員の負担が大きくなならないよう必要な対応策を考えていくべきだ。

※無断転載不可